

2017年（平成29年） 8月4日（金曜日）

毎週（金）14:00発行

発行所 (一財)日本エネルギー経済研究所
石油情報センター電話 (03) 3534-7411 (代)
FAX (03) 3534-7422〒104-8581 東京都中央区勝どき1-13-1イヌビル・カドキ11階
ホームページ <http://oil-info.ieej.or.jp>

■ 概況

7/20~7/26のNYMEX・WTIは、45.77~48.75ドルの範囲で堅調に推移した。

7月27日は、前日の米国原油・石油製品在庫の減少報告、複数の米シェール生産大手の設備投資削減発表等を受けて、米国の供給過剰感の後退から、4営業日続伸した。9月限の終値は前日比0.29ドル高の49.04ドルだった。

週末28日は、需給均衡回復への期待感の高まりに加え、ドル安・ユーロ高の進行に伴う原油先物の割安感から、買い進まれ、5営業日続伸した。シェルのナイジェリア子会社のパイプライン事故に伴う不可抗力条項の延長発表も後押しした。また、ペーカーヒューズ社の米国内石油掘削リグ稼働数が766基（前週比2基増）と2015年4月以来の高水準となったが、市場への影響は限定的だった。9月限の終値は前日比0.67ドル高の49.71ドルだった。

週明け31日は、引き続き、需給均衡回復への期待感、ドル安・ユーロ高の進行に加え、OPECと非OPEC主要産油国の合同専門家会議（8月7~8日、アブダビ）での追加減産検討への期待、憲法改正議会議決に伴うベネズエラへの経済制裁の検討報道があり、6営業日続伸し、5月24日（51.36ドル）以来約2か月振りに50ドル台を回復した。9月限の終値は前週末比0.46ドル高の50.17ドルだった。

8月1日は、7月のOPEC産油量が今年最高となり、減産順守率も従来の90%超から84%に落ちた旨のロイター報道、加えて、先週末の高値に伴う利益確定売りもあり、7営業日振りに反落した。9月限の終値は前日比1.01ドル安の49.16ドルだった。

2日は、EIAの米国在庫週報でガソリン在庫が大きく減少

し、前週のガソリン消費が過去最高となったことから、反発した。9月限の終値は前日比0.43ドル高の49.59ドルだった。

アジアの指標原油である中東産パイ原油/東京市場（9月渡し）は、前週46.70~49.00ドルの範囲で推移した。7月27日は49.30ドル、28日は49.60ドル、31日は50.50ドル、8月1日は51.30ドル、2日は50.10ドルで推移した。

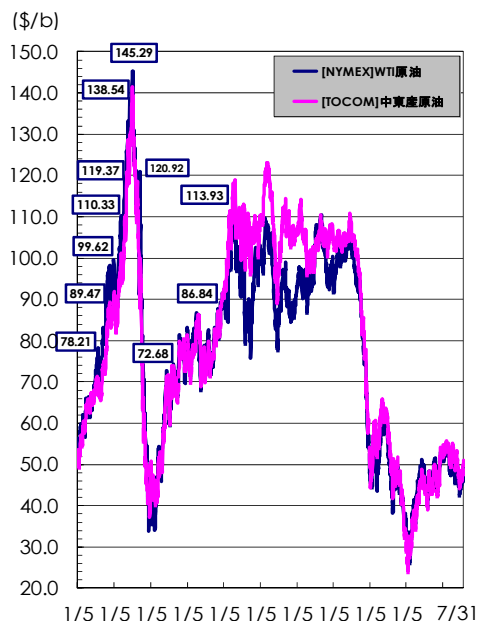
為替は、前週110.88~112.05円で推移した。7月27日は110.90円、28日は111.08円、31日は110.35円、8月1日は110.27円、2日は110.43円で推移した。

財務省が28日発表した貿易統計速報（旬間ベース）によると、7月上旬の原油輸入平均CIF価格は、34,620円/klとなり、前旬を1,287円下回った。ドル建てでは49.44ドルで前旬比2.40ドル高。為替レートは1ドル/111.33円。

主要元売会社の8月第2週に適用する卸価格は、全社0.5円の値上げとなった。原油価格は値上がりし、為替レートは円高だったが、原油調達コストは値上がりした。

そのような中で、7月31日時点の小売価格は、ガソリンが0.1円値下がりの131.0円、軽油は横ばいの110.0円、灯油も横ばいの76.1円だった。ガソリンは4週振りの値下がり、軽油は2週連続の横ばい、灯油は2週振りの横ばいだった。この週（8月第1週）の原油コストは値上がりし、元売の卸価格は、据え置きだった。

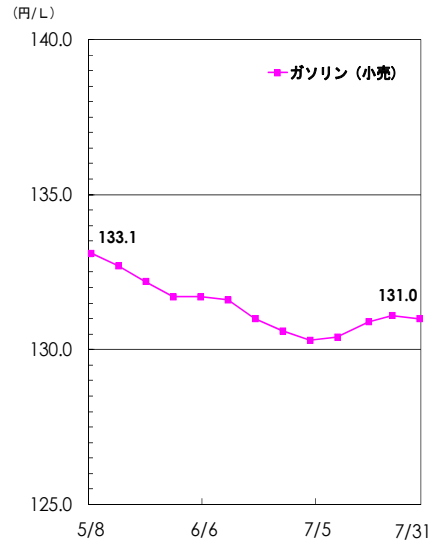
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	7/23 ~ 7/29	3,656 ▲96	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	93.4 ▲2.5	▲ -
	原油在庫量 (千kl)	7/29	13,378 ▼-239	▼ -
価格	中東産原油 (TOCOM) (\$/bbl)	7/31	50.94 ▲3.69	▲ 9.8
	WTI原油 (NYMEX) (\$/bbl)	7/31	50.17 ▲3.83	▲ 10.1
	原油CIF単価 (\$/bbl)	7月上旬	49.44 ▼-2.40	▲ 1.70
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	34,620 ▼-1,287	▲ 3,667
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	111.33 ▼-1.20	▼ -8.25
	外国為替TTSレート (¥/\$)	7/31	111.35 ▲0.53	▼ -7.90



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/23 ~ 7/29	1,040 ▼ -53	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	927 ▼ -92	▼ -	
	輸出	"	92 ▲ 14	▲ -	
	在庫	7/29	1,745 ▲ 21	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/25 ~ 7/31	49.6 ▼ -0.1	▲ 8.0	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/25 ~ 7/31	49.2 ▼ -0.1	▲ 9.3
		(TOCOM/中部)	7/31	49.8 ➡ 0.0	▲ 10.5
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/31	131.0 ▼ -0.1	▲ 8.9	

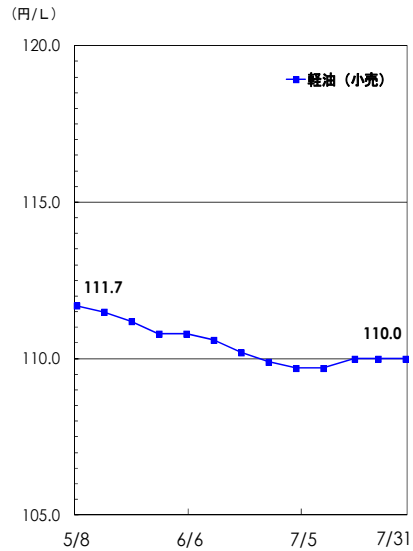
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

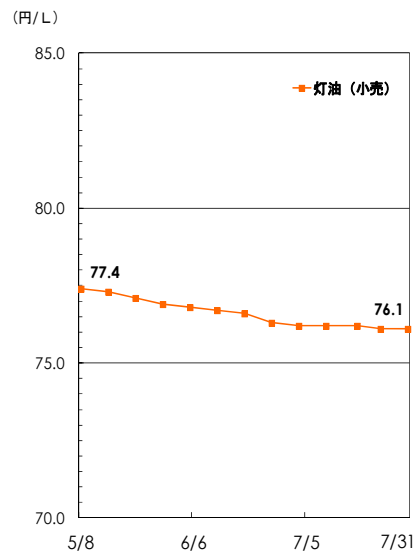
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/23 ~ 7/29	980 ▲ 134	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	635 ▼ -35	▼ -	
	輸出	"	304 ▲ 106	▲ -	
	在庫	7/29	1,462 ▲ 40	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/25 ~ 7/31	48.0 ➡ 0.0	▲ 8.5	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/25 ~ 7/31	48.0 ➡ 0.0	▲ 10.8
		(TOCOM/中部)	7/31	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/31	110.0 ➡ 0.0	▲ 7.6	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/23 ~ 7/29	211 ▲ 71	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	89 ▲ 17	▼ -	
	輸出	"	0 ➡ 0	➡ -	
	在庫	7/29	1,858 ▲ 121	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/25 ~ 7/31	47.6 ▲ 0.1	▲ 9.1	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/25 ~ 7/31	47.7 ▼ -0.3	▲ 10.4
		(TOCOM/中部)	7/31	47.1 ▼ -0.3	▲ 10.1
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/31	76.1 ➡ 0.0	▲ 12.2	



■ 関連情報

1 海外/原油

8月2日のNYMEX市場WTI原油は、米国エネルギー情報局(EIA)の米国在庫週報で、原油が前週比150万バレル減と市場予想(同300万バレル減)を大きく下回ったことから売りが先行したが、ガソリンが同250万バレル減と市場予想(同30万バレル減)を大きく上回り、前週のガソリン需要が日量984万バレルと過去最高と推定されることから、夏場のドライブシーズンでの消費への期待が高まり、反発した。混乱が続くトランプ政権の人事等を背景とするユーロ高・ドル安も買い材料となった。9月限の終値は、前日比0.43ドル高の49.59ドル、10月限の終値は前日比0.44ドル高の49.73ド

ルだった。

EIAによると、7月31日時点のガソリンの小売価格は前週比4.0セント値上がりの1ガロン2.352ドル(69.1円/ℓ)となった。ディーゼルは前週比2.4セント値上がりの2.531ドル(74.4円/ℓ)。ガソリンは2週連続の値上がり、ディーゼルは5週連続の値上がり。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、7月23日~7月29日に休止したトッパー能力は9.0万バレル/日で、前週に対して12.1万バレル/日減少した(全処理能力は351.9万バレル/日)。

原油処理量は365.6万klと、前週に比べ9.6万kl増加。前年に対しては9.2万klの減少。トッパー稼働率は93.4%と前週に対して2.5ポイントの増加、前年に対しては5.2ポイントの増加となった。

生産は前週に比べてガソリン、ジェットが減産となり、その他の油種で増産となった。ガソリン/4.8%減、ジェット/13.4%減、灯油/50.8%増、軽油/15.8%増、A重油/21.0%増、C重油/18.4%増。今週のC重油の輸入は10.9万kl(前週比10.4万kl増)。軽油の輸出は30.4万kl(前週比10.6万kl増)。

出荷(輸入分を除く)は、前週比ではガソリン、軽油、A重油が減少し、その他の油種で増加した。前年比では、ガソリン、灯油、軽油が減少し、その他の油種で増加した。ガソリンの出荷は92.7万kl(対前週9.0%減)と2週振りに前週比で減少、6週連続で前年比で減少となり、2週振りに100万klを下回った。

ジェット18.3万kl(対前週185.8%増)、灯油8.9万kl

(対前週24.6%増)、軽油63.5万kl(対前週5.3%減)、A重油19.1万kl(対前週6.1%減)、C重油31.6万kl(対前週2.8%増)。

(単位:千KL)

	今週 (7/23 ~ 7/29)	前週 (7/16 ~ 7/22)	前週比
ガソリン	927	1,019	▼ -92 (-9%)
ジェット燃料	183	64	▲ 119 (186%)
灯油	89	72	▲ 17 (24%)
軽油	635	670	▼ -35 (-5%)
A重油	191	204	▼ -13 (-6%)
C重油	316	308	▲ 8 (3%)
合計	2,341	2,337	▲ 4 (0%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

7月29日時点の在庫は、ジェットのみが取り崩しとなり、その他の油種で積み増しとなった。前年に対しては、灯油、軽油が取り崩しとなり、その他の油種で積み増しとなった。

ガソリンは174.5万kl、前週差2.1万kl増。前年に対しては3.4万kl多い。

灯油は185.8万kl、前週差12.1万kl増。前年に対しては32.2万kl少ない。

軽油は146.2万kl、前週差4.0万kl増。前年に対しては4.5万kl少ない。

A重油は78.1万kl、前週差0.6万kl増。前年に対しては2.0万kl多い。

C重油は208.2万kl、前週差5.9万kl増。前年に対しては18.8万kl多い。

(単位:千KL)

	今週 (7/29)	前週 (7/22)	前週比
ガソリン	1,745	1,724	▲ 21 (1%)
ジェット燃料	1,153	1,208	▼ -55 (-5%)
灯油	1,858	1,737	▲ 121 (7%)
軽油	1,462	1,422	▲ 40 (3%)
A重油	781	775	▲ 6 (1%)
C重油	2,082	2,023	▲ 59 (3%)
合計	9,081	8,889	▲ 192 (2.2%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

7月25日から7月31日までの原油コストは、原油価格は値上がりし、為替レートの円高がこれをやや相殺したが、原油コストは値上がりしたと見られる。

陸上スポット価格は、ガソリン103円台で堅調、軽油47～48円台で堅調、灯油47円台でやや堅調に推移した。

海上スポット価格は、ガソリン103～105円台で大きく値上がり、軽油48～49円台で堅調、灯油47円台で連日推移した。

先物価格は、ガソリン102～103円台で堅調に、軽油48円台で横ばい、灯油47～48円台で堅調に推移した。元売の卸

価格は、0.5円の値上げだった。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

原油コストは値上がりし、製品スポット市況は、海上・ガソリンが値下がりしたのを除き、油種・取引によって、わずかな値上がりと値下がりに分かれた。週間のガソリン出荷量(輸入分を除く)は、2週振りに前週比減少、2週振りに100万klを下回り、6週連続で前年割れとなった。

8月第2週(8月3日～8月9日)適用の元売卸売価格に影響を与える直近の陸上スポット価格(7月25日～7月31日/千葉、川崎、中京、阪神の4地区の陸上ラック価格平均値)は、ガソリンは0.1円の値下がり、灯油は0.1円の値上がり、軽油は横ばいだった。東京湾渡しの海上スポット平均価格は、ガソリンが0.8円の値下がり、灯油は0.3円の値下がり、軽油は0.5円の値上がりだった。先物価格は、ガソリンが0.1円の値下がり、軽油が横ばい、灯油は0.3円の値下がりだった。原油価格は値上がりし、為替の円高がこれを相殺したが、原油コストは値上がりとなった。

8月第2週の大手元売の卸売価格は、全社とも0.5円の値上げとなった。なお、元売会社は、2010年から卸売価格の改定に際して、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断する方式としたが、2014年6月から、原油調達コストをより重視する方式に変更した。

(RIM) (単位: 円/%)

[陸上ローリー 4地区平均]	今週 (7/25 ~ 7/31)	前週 (7/18 ~ 7/24)	前週比
	レギュラー	49.6	49.7
灯油	47.6	47.5	▲ 0.1
軽油	48.0	48.0	➡ 0.0

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値] [平均]	今週 (7/25 ~ 7/31)	前週 (7/18 ~ 7/24)	前週比
	レギュラー	49.2	49.3
灯油	47.7	48.0	▼ -0.3
軽油	48.0	48.0	➡ 0.0

※上記価格は税抜き価格

参考値 (7/25～7/31実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▼ -0.1	▼ -0.1	▼ -0.1
灯油	▲ 0.1	▼ -0.3	▼ -0.1
軽油	➡ 0.0	➡ 0.0	➡ 0.0
A重油	➡ 0.0		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

7月31日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比0.1円値下がりの131.0円、軽油は横ばいの110.0円、灯油も横ばいの76.1円だった。ガソリンは4週振りの値下がり、軽油は2週連続の横ばい、灯油は2週振りの横ばいだった。

都道府県別の動向として、ガソリンの値上がりは17府県、横ばいは11府県、値下がり19都道県だった。都道府県別のガソリンの全国最安値は、岡山県の125.3円(前週比0.1円安)、次が埼玉県の126.8円(同0.2円安)だった。最高値は沖縄県の139.4円(同0.3円安)だった。都道府県別で、最も値上がりしたのは前週比0.3円高の愛媛県(132.4円)、三重県(131.2円)、兵庫県(130.2円)、最も値下がりした県は同

0.8円安の北海道(131.7円)、横ばいが鹿児島県・高知県・大分県・大阪府・秋田県・山口県・新潟県・広島県・愛知県・鳥取県・岩手県だった。

原油コストはわずかに値上がりしたが、元売りの卸価格は据え置きと0.5円の値下げに分かれた。4週振りでガソリン小売価格はわずかに値下がりした。今週の原油価格は値上がりし、為替レートの円高がこれをわずかに相殺したが、原油コストは値上がりした。元売会社の卸価格は、全社・全油種0.5円の値上げであった。次週(8月7日)のガソリンの小売価格は、小幅な値上がりが予想される。

(資工庁公表) (単位: 円/%)

[週動向]	今週 (7/31)	前週 (7/24)	前週比	直近高値	
	レギュラー	131.0	131.1	▼ -0.1	08/8/4
灯油	76.1	76.1	➡ 0.0	08/8/11	132.1
軽油	110.0	110.0	➡ 0.0	08/8/4	167.4

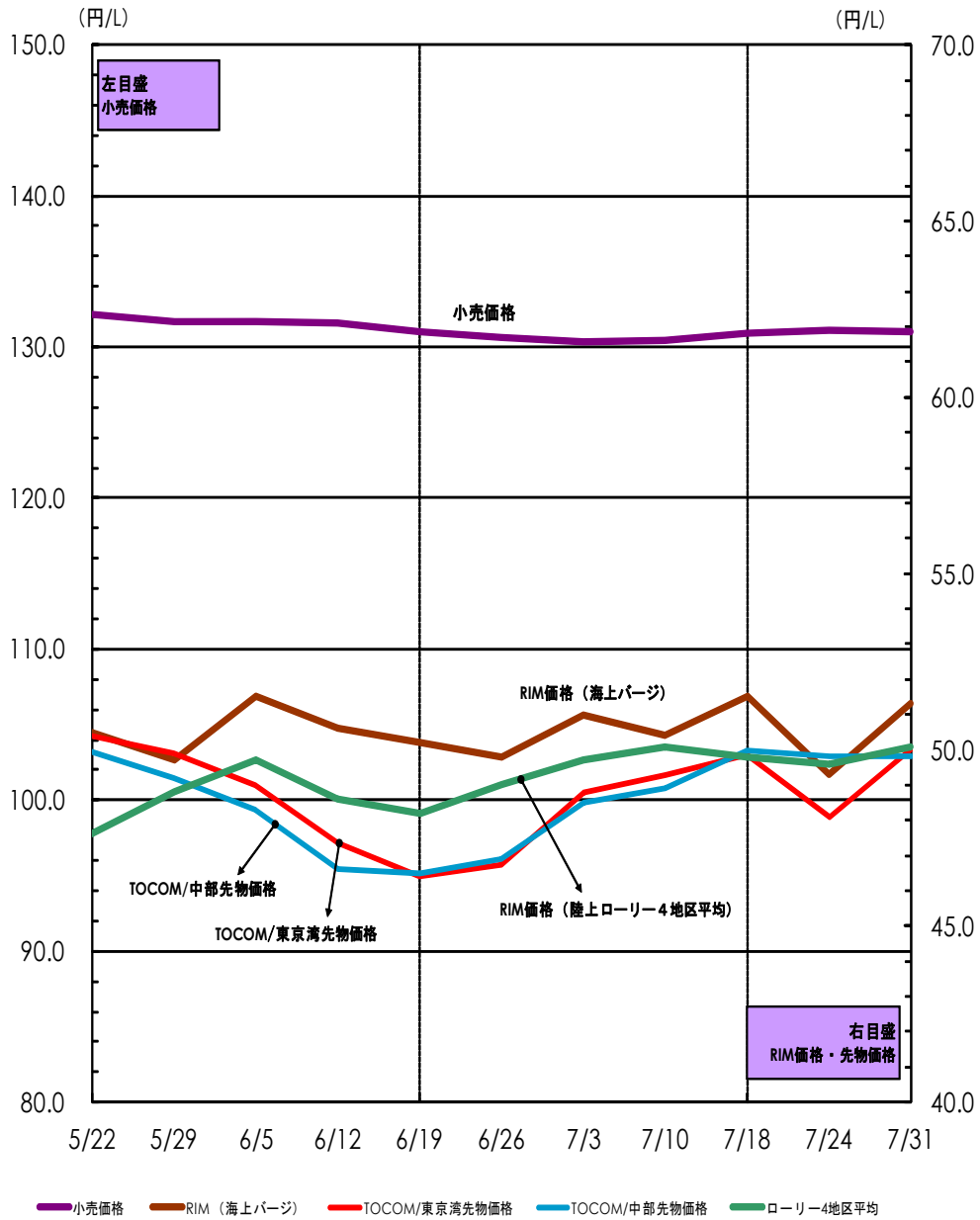
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2017/5/22 ~ 2017/7/31)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<http://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2017第18号)の公表は、8/11(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(平成28年9月末現在)は、12月21日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターへドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange: NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange: TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate: 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の東京、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾 及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈運動向調査〉

約2,000SSを対象に週次ベースのSS店頭における現金一般価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁-HPIに掲載)。